

令和7年度 幼児教育研修（保育の質向上 加藤ゼミ）
「記録のとり方」



日時：第1回 令和7年 7月22日（火）15:00～17:00
日時：第2回 令和7年 9月12日（火）15:00～17:00
日時：第3回 令和6年11月11日（火）15:00～17:00
日時：第4回 令和7年12月9日（火）15:00～17:00
会場：各回 足立区勤労福祉会館

講師：山梨大学 名誉教授 加藤 繁美 氏

グループに分かれて、持ち寄った実践事例を議論しながら、自分自身の保育を他者に伝えることを学んでいきました。

グループで事例の読み合わせ



自分自身の保育を他者に伝える・語る

- ・書くことに意味があり、書き留めたものは宝である。自分で書いたものを語ることで、足りないものに気付いていく。（反省・振り返り）
- ・記録を読み上げているのを聞いていると、疑問に思うことが出てくる。
- ・子どもたちの行動に、保育者はどう関わると良いのか、記録から読み取れる。

反省は、振り返りである

記録を書くことで、その日の「良かったこと」「うまくいったこと」「失敗したこと」などが見えてくる。振り返りは意味付けになる。見えてきたことが反省＝振り返りとなる。その振り返りがとても大事であり、理論的に意味付ける作業をしていく。

記録を読む

なぜ？



仲間に自分を評価してもらう経験が少ない。だからこそ他者の記録を読み、仲間に対して評価し合う、相手を尊重し合う経験をしていくことが大事となっていく。

グループのNO.1事例を発表する

「〇〇という視点が込められている」という理論付けをした発表をするために・・・



読み合わせ後、話し合いでNO.1を決め、それを深掘りして理論について語り合っていく。



「〇〇の部分が、実践記録の中に描かれているか」「実践記録を理論化できるか」「どんな保育の理論があるのか」「理論を表現しているのはどれか」



これらを考えるような話し合いをし、発表に臨む。



NO.1に選ばれた記録者と、その記録を推薦した人が前で発表します。発表を聞いた先生が内容を深掘りし、みんなで考えていながら理論付けをします。

実践記録

タイトル：一緒にやろうよ（3歳児）

廊下の共有スペースにザリガニやメダカ、カメなどを飼育している。

メダカとカメは主に職員が水槽の掃除などをしているが（カメはやや凶暴なため）ザリガニは特に世話の担当は決めていない。クラスの飼育物の世話と一緒に5歳児がしていることが多い。3歳児のAとBもザリガニが好きで、頻繁に廊下でザリガニを見たり手に持ってみようとしていたりしている。

ある日、ザリガニの水が臭いことに気づいたA。

A「なんか臭いよね」 → きっかけになっている言葉

B「水が腐ってるんじゃない？」 → 分析している言葉

A「きれいにしなさいよ！」 → 提案している言葉

B「そうだね！一緒にやろう！」 → 行動の提案の言葉

2人でザリガニの水槽を持ち、テラスの水道まで運ぶ。

ザリガニや石などを水槽から出すA、水槽の水を入れ替えるB。

新しい水が水槽に入るとAが水槽にザリガニを戻す。

A「きれいになったね！」

B「ザリガニ喜んでるね！」

A「よし！戻ろう！」

また2人で水槽を持ち、廊下に運んでいった。

担任に知らせず、一緒にいた友達と「きれいにしなさいよ」と行動に移したことに驚いた。



自分たちで気付いたことが保育の中で意味付けになる。担当を決めず、今回のように子どもたちが自分で気付いていくことが大切。

年度の後半に入り、「友達と一緒に」に心強さを感じている姿が見られ、今回も友達と一緒にだから「大丈夫。自分たちでもできる」と思ったのだと思う。



これらは友達と一緒に考えていく思考の深まりである。誰の指示もなく、自分たちで考え、行動する面白さがある。3歳児でも「できる」「できた」という感動につながる。

Bは、まだザリガニをつかむことに怖さがある。Aはそれを分かっている。だから自然と役割分担もできていた。友達同士、お互いに認め合っている様子や信頼している様子が見られ、つながりが深まっていることを感じた。



世話の担当を決めてあると、飼育がノルマになりやすく、責任がついてくるため子どもの気付きにつながらない。〇〇しなくてはいけない、発展させなくてはいけないということがないため、自分の意志で行動しようとし、仲間と一緒に行動することにつながる。

研修生の報告書より

第1回

実際に書いた記録をもとに、改めて自分の保育を振り返り、見直す事が出来た。まだ実践記録としてしっかり書く事はできていないが、これから書く回数を増やして書くスキルを上げていきたい。また、記録として残す事で気付きが沢山あったので、他園の先生方の書いたものをしっかりと読み、意見を聞いて参考にしたい。

第3回

回を重ねる毎に、子どもたちの姿を「どうしてこうなったのか？」と、グループの中でより深く話せるようになってきた。また、同じような状況が自分にもあった時に、自分とは違う意見を聞くことも新鮮で、このゼミならではの感じた。毎回加藤先生の講評で、しっかり年齢の発達を捉えてお話して下さることで、今の子どもたちの育ちの様子が確認できたり、また、こんなふうになっていくのかなど、見通しを持つことができたりと、次の日の保育で試してみようと思うことがたくさんあった。

第2回

実践記録では、保育者と子どものやりとりだけではなく、その前後のエピソードが実は鍵になっている事がよくわかった。一つのエピソードを深く掘り下げる機会を通して、子どもたちのやりたかったことや思いが見え、私たちの関わりが大きなポイントになっていることを感じた。

第4回

3回実践記録を提出し、研修に取り組んできたが、まだまだ自分の記録に不足部分があったり、書いてる中でも子どもの読み取りに浅い部分があると感じた。記録したものを読み解いてみると、子どもの気持ちの変化を見たり、保育者の援助の仕方の振り返りをしたりする時に、その場面の流れがはっきりわかるように感じた。エピソード記録がその場面の記録だけでなく、保育を振り返るために状況も伝えやすく重要なものと感じた。